



GRULLA COMMON AVENUE からみた施設エントランスの様子。パーグレートの設置により人の溜まりをつくる。

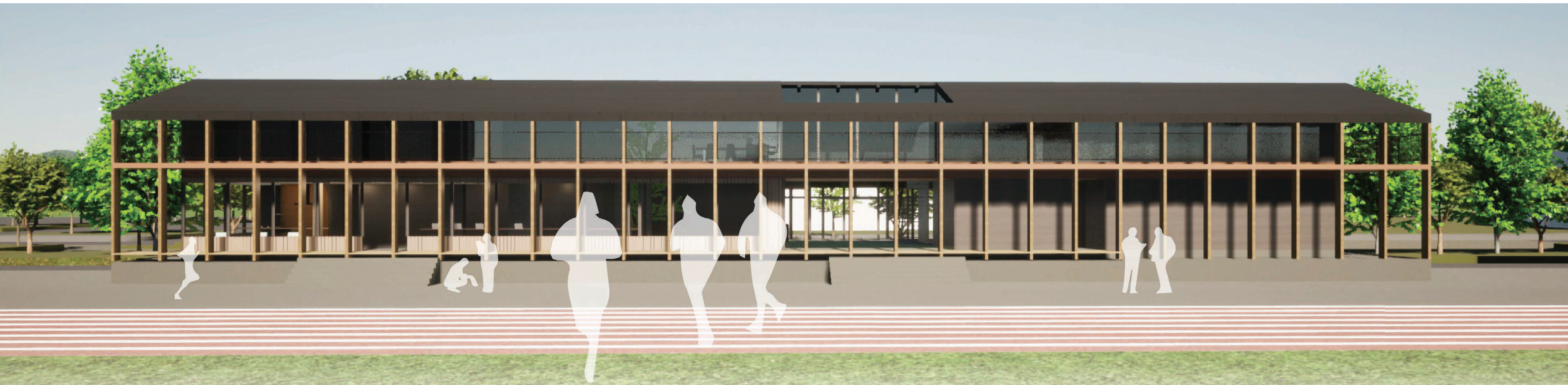
施設整備に関する基本的な考え方

公共施設の複合化のメリットを活かした共有スペース「GRULLA COMMON」の計画

今回の施設を計画するにあたり、「グルージャクラブハウス」、「一般客が利用するスポーツ交流拠点」の2つのプログラムの複合化による価値の向上を目指すことが大切だと考えた。

そこで、それらの動線のハブとなるエントランスや多目的ホールを共有化する「GRULLA COMMON(グルージャ・コモン)」を企画した。「グルージャ・コモン」により、スポーツを通じた地域コミュニティ形成を核に様々な価値を向上させ、施設の機能性を高めることができると考える。

「グルージャ・コモン」は、この施設の核となる場で、「紫波町」と「グルージャ盛岡」が協働することで、スポーツを通じた地域コミュニティを形成し、様々な地域経営課題を解決し、地域発展することを目的としている。



グルージャの利便性

チームアイデンティティを醸成する居場所づくり

- ① チームメンバー全員を見渡せるロッカールーム**
チームメンバー全員が互いに見渡せる配置は、コミュニケーションを促進し、チームの結束力を高めるのに役立つため、選手たちはお互いの存在を認識し、チーム全体の連帯感を醸成することができる。また、コーチやキャプテンの指示の伝達のしやすさ、チームメイトの見守りやサポート、緊急時に素早く対応する等の安全性も高められると考える。
また、ロッカールームは長時間過ごす選手の居場所であり、チームアイデンティティを醸成する重要な場と考え、照明計画も重要だと考える。照明計画はタスクアンビエント照明の考えを採用し、各個人ブースごとに明るさの取れる手元照明と、全体を柔らかく包む間接照明の併用を行い、実用性と視覚的快適性を兼ね備えていくことを提案する。

② 選手のコンディション・モチベーションを整える休憩室

休憩室はスポーツ選手にとっては休憩室が非常に重要な役割を果たす。リフレッシュや栄養補給、プレーの振り返りや戦術検討等、選手の体調管理やパフォーマンス向上に直接影響を与える場所と考え、グラウンドや街路樹の見渡せる眺望のいい角部屋とする。
キッチンカウンターをベースに、プロテインドリンク等の栄養補給やをしながらラフなコミュニケーションが生まれる「キッチンスペース」、リフレッシュできる書籍や雑誌を並べることで本棚を設えた壁に面した「カウンター席」、ヘッドホン等をしながら、仮眠をとったりプライベートな時間を過ごすこともできる一人がけの「ソファ席」、数名でテーブルを囲ってくつろぐことのできる「テーブル席」など、限られた空間でもリラックスできるような設えを提案する。

③ 「溜まりの場」を併設した通路空間

ロッカールームをはじめとした、選手が利用する各室の動線ともなっている通路空間は、通路幅を広めに設定し、単なる通過動線ではなく、併せてカウンター席も設ける。グラウンドを眺めながらのプレーの振り返りや、インプットの時間を設けることが可能。グルージャ専用ゾーンの出入り口付近には、階段動線と隣接したラウンジを設ける。
通路の随所にこうした溜まりの場をつくることで、チームコミュニケーションが自然に行われ、同時に施設の利用に柔軟性を持たせることができると考える。
トレーナールームの利便性確保
トレーナールームは、グラウンドを見渡せる配置とし、グラウンドでの怪我等のトラブルの際にも、外の状況が見えやすい計画とした。また、一般との共用施設であるトレーニングルームからもアクセスしやすい配置とし、メンテナンスとトレーニングを両立しやすい配置とした。

施設の顔となるミックスゾーン (mixed zone) の設定

記者が競技直後の選手に対して簡単なインタビューをすることができる、ミックスゾーン(取材用の背景となる場)を設ける。施設のエントランスと併せてミックスゾーンを設けることで、エントランスが施設の顔となり、グルージャ盛岡の活動がより市民との接点を持つ契機となる場と考える。

軒先アップスペースの確保

グルージャの選手をはじめとしたグラウンド利用者にとって、日陰や雨掛かりのしない半屋外空間は重要だと考え、軒先にアップスペースを設けた。見学スペースと棲み分けすることで、グラウンド利用者がより競技に打ち込める環境を整えていく。

トレーナーと用具係の作業動線の効率化

トレーナーや用具係等、選手たちの活動を支える方々の作業動線の効率化を図る。また、2Fの事務室と、1F洗濯室の間は吹き抜けにすることで、様々な役割のスタッフ同士が適切に連携・コミュニケーションを図れるようになると思う。



休憩室。書籍などを置いたデスクスペースを設けることで、インプットやリフレッシュを効率的に可能。



休憩室から通路空間を見た様子。キッチンは選手同士が自然にコミュニケーションを取れる形状としている。

ランドスケープ・動線計画

ランドスケープ 居場所としての園路「GRULLA COMMON AVENUE」

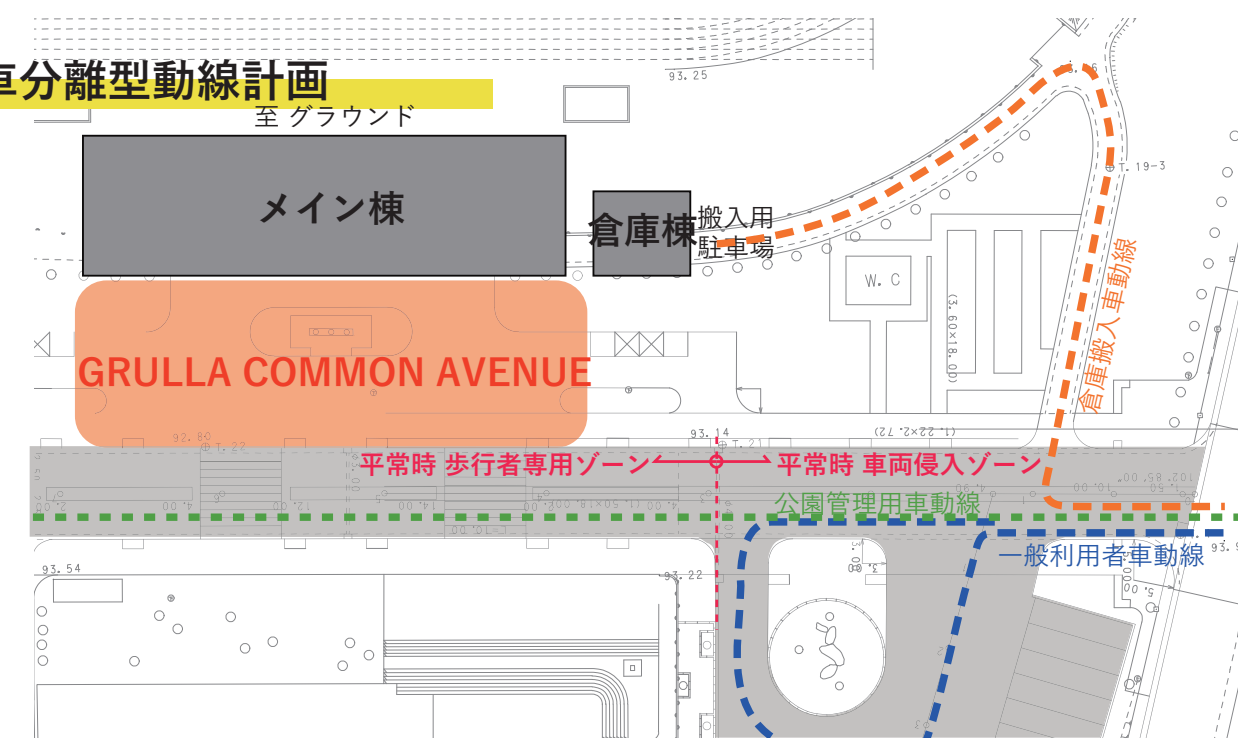
運動公園の入口正面に立地するこの広場は、施設の印象を決定づける重要な場であると考え。現状のランドスケープでは、車道・歩道・広場と境界がはっきりと分かれており、人の居場所として記憶に残りにくく、来園者を歓迎するランドスケープとなっていない。今回、建物の賑わいや活動 / アクティビティが公園全体に滲み出すよう、施設東側園路園路を「GRULLA COMMON AVENUE(グルージャ・コモンアベニュー)」として、歩道と広場を一体的に整備し、人々の居場所となるコンモンスペースとしての園路を実現する。

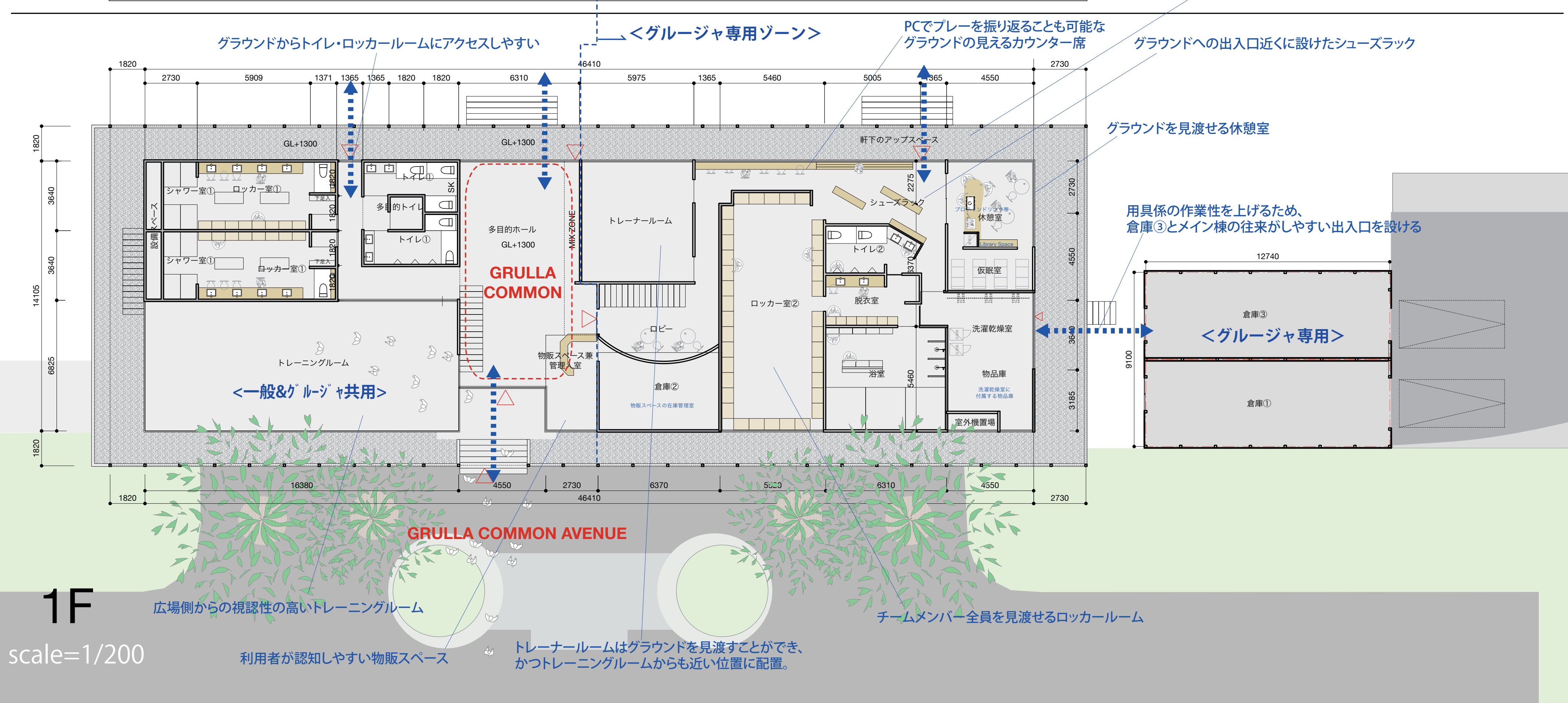
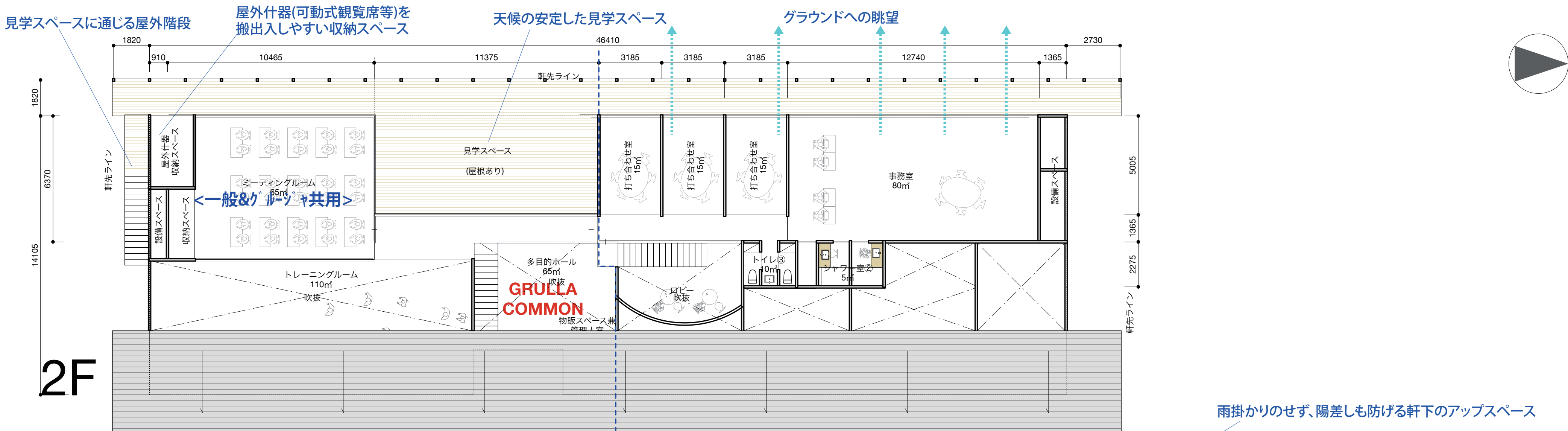
しかし、予算がタイトであることを鑑みて、想定整備範囲全てに範囲を広げず、本施設周辺範囲にエリアを絞り、舗装の一体化、植栽の入れ替えを行うことで、施設の閉塞的な印象を変えることを提案する。ただし、オプションではあるが、紫波町が現在の予算とは別に予算措置をした場合は、想定整備範囲までランドスケープ改修範囲を拡張することは可能である。

配置・動線計画

既存の車両動線を活かした歩車分離型動線計画

倉庫棟への搬入車動線は現状の車動線を活用する。メイン棟北側に倉庫棟をまとめることで、平常時の車両侵入ゾーンを現状と同じく最小限に抑え、歩行者の安全確保のしやすい動線計画とする。これにより、GRULLA COMMON AVENUE はより安全な、人々の居場所となる園路として利用されると考える。





紫波運動公園内に立地するスポーツ交流拠点施設としての機能性・安全性

グラウンド側に軒先空間をつくり、**1階にウォームアップスペース、2階には見学スペースを配置**

今回、日差しや雨などを防ぐ、軒先空間を建物のグラウンド側に設置した。これにより、見学者は日差しや雨などを気にせずに見学することが可能となり、グラウンドを利用する者も日差しの強い中で、日陰でウォームアップしたり、選手間のコミュニケーション、休憩などを取ることができる。これにより、機能性と安全性の確保をしている。

園路側からのトレーニングルームを視認性を高め、施設へのアクセシビリティを向上

公園における建築物は、どこからみても、来園者に対して視認性を高め、施設へのアクセシビリティを向上させることが重要である。今回の施設の場合、グラウンド側は、軒先空間により選手の賑わいを持ったファサードを持ち、園路側には、施設の顔となる「グルージャコモン」と「トレーニングルーム」を配置し、視認性を高めることで、施設の賑わいの見える化や、施設へのアクセシビリティを向上させる。

グラウンド利用者のトイレ・ロッカールームへのアクセシビリティの向上

施設利用者の多くがグラウンド利用される方が多いことを鑑み、グラウンドからトイレ・ロッカールームへのアクセシビリティを高めることで、施設利用の利便性を高める。また、その他施設利用者も、メインエントランスから容易にトイレにアクセスすることも可能なよう、適切にサイン計画を行う。

コンセプトのあるトレーニングルーム

同じ運動公園内にある紫波町総合体育館内のトレーニングルームも現状のまま利用することを鑑み、本施設で新設するトレーニングルームと総合体育館内の既存トレーニングルームにおいて、トレーニング機器のコンセプト設定を明確に行う必要があると考える。

今回新設するトレーニングルームは、限られた床面積の中で最大限利用価値を高めるために、プロサッカー選手の利用を優先した機器選定を行い、同時に学生アスリートや、オガール等の施設も併せ合宿等で訪れたプロチームの利用、パーソナルトレーニングを利用する町民等の利用を想定することを考える。目的を持った施設整備をすることにより、まちの公共資産としての価値を高めることができると考える。

施設の柔軟な利用を促すミーティングルーム

ミーティングルームは一般的な会議利用はもちろんのこと、見学スペースとも一体的に利用できる作りとすることで、町民活動やイベント、パブリックビューイング等、柔軟な施設活用に対応できる作りとする。

また、トレーニングルームからもミーティングルームの様子が垣間見えることで、施設の利用を促すとともに、施設の複合化による価値が高まると考える。

06. 町の課題に対するアプローチ

「グルージャコモン」による様々な都市経営課題の解決

今回の建築ではコンセプトとして、「グルージャコモン」を計画している。「グルージャコモン」とは、この施設の核となる場で、「紫波町」と「グルージャ盛岡」が協働することで、スポーツを通じた地域コミュニティを形成し、様々な地域経営課題を解決し、地域発展することを目的としている。

具体的には、この空間でグルージャの選手や町民、子どもたちが出会い、交流をとることで、子どもたちの非認知能力を向上、町民の健康づくり、ウェルネスの向上により、扶助費の削減に貢献する。「グルージャコモン」による交流は、「共感」をもった施設経営と町民のシビックプライドの向上に繋がると考える。結果、紫波運動公園でのパブリックライフの豊かさは、公園に行く楽しさとなり、施設の利用率が高まり、より共感を生む公共施設となり、健全な公共施設経営を実現できる。

継続した紫波運動公園の公共施設マネジメントに向けて

今後の紫波運動公園の健全な公共施設マネジメントの最初の取り組みとして、本事業が位置付けられていると仕様書等から読み取った。今回をきっかけに、スポーツコミュニティを核に紫波町の都市経営課題を解決し、その後の体育館、野球場の改修・改築に繋げる必要があると考えている。

そのためには、本施設が運動公園全体の賑わいに繋ぐ必要があると考えている。そのため、施設利用者の結節点となるグルージャコモンは施設中央に配置し、さらには園路とグラウンドを緩やかに繋げ、施設に賑わいを運動公園全体に波及するよう計画した。これにより、その後の継続した他の施設の改築に弾みをつける。

紫波町循環型まちづくりの理念に基づいた計画

木造かつ RC 防火壁が不要となる施設計画

「新世紀未来宣言」及び「紫波町循環型まちづくり条例」の理念に基づき、本施設は木造建築物とする。倉庫棟を別棟で建てることで 1000 ㎡未満とし、環境負荷の高い RC 造の防火壁等を入れる必要がなくなるため、紫波町の循環型まちづくりを実現する一助となると考える。

木ファサードによる景観づくり

今回のファサードに木外壁を採用し、紫波町の景観の見本となるようなファサードとした。紫波町の場合、22 条区域であること、あわせて、隣地境界に余裕があることを鑑みるとコストパフォーマンスの面からも、「木外壁」を推進できる地域性と言える。「循環型まちづくり」を都市景観からの面でも実現できるよう計画した。

